

極附幡隨長兵衛
四千兩小判梅葉
盲長屋梅加賀鳶

名作歌謡全集 十二

水天宮利生深川
島衛月白浪

版元

東京創元新社

昭和四十五年十二月二十五日 発行

全集伎舞歌作名

第12巻 三集弥阿黙竹河

河竹登志夫
郡司正勝
山本二郎
戸板康二
利倉幸一

監修者

発行所

株式
会社

東京創元社

代表者 秋山孝男

(162) 東京都新宿区新小川町一―十六
電話(〇三)二六八―八二三一
振替 東京 一五六五

印刷・株式会社 金羊社
製本・株式会社 鈴木製本所
用紙・株式会社 富士川洋紙店
写真版・(株)興陽社、(株)方英社

万一、落丁乱丁がありましたらお取替えいたします。

目次 (名作歌舞伎全集第十二卷 河竹黙阿弥集三)

極附幡隨長兵衛 きわめつきばんずい ちようべえ	(湯殿の長兵衛)	(装置図)	八木恵一	三
四千両小判梅葉 しせんりようこばんのうめのは	(四千両)	(装置図)	釘町久磨次	空
盲長屋梅加賀鳶 めくらなやうめがか とび	(加賀鳶)	(装置図)	高根宏浩	一三五
水天宮利生深川 すいてんぐうめぐみのふかがわ	(筆売幸兵衛)	(装置図)	釘町久磨次	二五五
島衛月白浪 しま ちどりつきのはしら なみ	(島ちどり)	(装置図)	萩原勝美	二九五

解説

校訂について

写真と資料提供—演劇博物館、演劇出版社、大谷図書館

河竹登志夫、梅村豊、吉田千秋

河竹登志夫

河竹登志夫

極^{きわめ}附^{つき}幡^{ばん}随^{ずい}長^{ちやう}兵^べ衛^え

湯^ゆ殿^{どの}の長^{ちやう}兵^べ衛^え（二幕）



御定連の御好に随ひ
乍未熟も端物を選て

写本当昼場立読

頃ハ慶安三年打込む櫓の春角力に盛る若木の桜川が上見ぬ
閑の黒鷲を投し遺恨に橋場迄帰るを待乳の暗試合晴れぬ思
ひに母親のお牧が探る裏間も表向にて婚姻を結ぶ甲斐なき
腹切に娘お花が憂き別れ跡の菩提を唐犬も無罪と成りし出
牢に武士の意気地を立通す野守之助が悪計を諫むる主膳も
仇と成り命を捨て行末を頼む悴や女房のお時に諭す一言に
極楽十三清兵衛もとよめかねたる血のなみだ雨にちり行く
花川戸が水尾の屋敷の湯殿にてみがきあげたる男の本阿弥

極附幡随長兵衛

湯殿の長兵衛

河竹登志夫

江戸の俠客幡隨院長兵衛は数多くの狂言に登場するが、これは明治の作だけに実説にもとづいて正面からその人物を劇化した、すっきりした好篇。ことに長兵衛が水野十郎左衛門に暗殺される「湯殿」は、思いきった趣向と、町奴の心意気をうたいあげた名せりふにより、屈指の名場面といえよう。

慶安三年、江戸禰宜町の村山座は、坂田四郎左衛門の新狂言「公平法問・靜」で割れるような大入。その木戸前では酒に酔った旗本奴白柄組の侍が、町人の父娘に難題をふっかけるのを、町奴の唐大権兵衛がとりひしく。劇場内では芝居の最中だが、水野十郎左衛門の中間や家中の武士が花道へ上り、木戸番らに言いがかりをつけて芝居を妨害する

ので、見かねた幡隨長兵衛が仲裁に入り、あばれる武士をいためつける。棧敷で見物中の水野はこれを見て、ふかく遺恨を抱く。

長兵衛を頭とする町奴と白柄組は、劇場ばかりでなく吉原その他で小ぜりあいの絶え間なく、さらには町奴のひいき相撲の桜川五郎蔵と旗本が後押ししの黒鷲官太夫との勝負やその遺恨による殺害事件などのため、ますます險惡となっていた。御家のためにこれを憂えた水野の用人水野主膳は、長兵衛に殺意をいだく主人十郎左衛門に諫言する一方、単身花川戸の長兵衛宅へおもむき、水野から誘いがかかっても決して応じないでくれと頼む。が、主膳が帰ってまもなく、水野から、庭の藤を見ながら仲直りの酒宴をひらくからと、迎えの使者がくる。女房のお時や、かけつけた唐大権兵衛は必死にとめるが、恐れて避けたといわれては町奴の恥だと、長兵衛は死を覚悟し、女房や一子長松にそれとなく別れを告げて水野邸へ急ぐ。

待ち受ける水野は、忠臣主膳が諫言およばず眼前で切腹するのも冷やかに一笑に附し、やがて到着した長兵衛に大杯をすすめ、竹刀をもたせて腕前を試みた後、わざと長兵衛の衣服に酒をこぼし、着替えをすすめ湯殿へ案内する。無一物になった長兵衛は、立廻りのすえついに水野とその同僚進藤野守の助のために惨殺される。

その夜水道端に勢揃いした弟分の権兵衛はじめ長兵衛の子分たちは、水野邸へ仕返しに押しかけようとしたが、水野にはまもなく切腹の沙汰が下るときき、捌き役三浦次郎にまかせて引き上げる。

以上がここに収めた作の梗概で、今日の上演もこれによってゐる。もっとも二幕目長兵衛内場で、最初の桜川一件に関する仕出しのやりとりや、主膳の出るところ、水野邸における主膳の切腹などはふうふうカットされるが、三幕四場の段取りはこのとおりである。

しかし実はこれは明治十四年黙阿弥が書きおろしたところではなく、同二十四年にその弟子三世河竹新七の加筆を得て改訂したものである。しかしこの改訂は好評で以後もっぱらこれに拠っているので、ここにはこのほうを取り上げた。創元社旧版の『黙阿弥名作選』もこの台本を収載している。書きおろしのほうは、『黙阿弥全集』第十八巻にある。本名題はいずれも「極附幡随長兵衛」（きわめつきばんずいちょうべえ）。明治二十四年といえはまだ黙阿弥が在世中だったから、改訂台本を同題で上演することは、むしろ黙阿弥自身の宰領であつたにちがいない。

はじめに、順序として初演時のことと、その筋立について

て一言しておく。

初演は明治十四年（一八八一）十月、東京春木座。配役は、九代目団十郎（幡随長兵衛）、市川権十郎（水尾十郎左衛門・桜川五郎藏）、岩井紫若（長兵衛女房お時）、坂東家橘（唐犬権兵衛）、五代目市川小團次（進藤野守之助・出尻清兵衛）、大谷門藏（極楽十三）、市川寿美藏（黒鷲官太夫・用人水尾主膳）、中村銀之助（黒沢庄九郎）など。

右にみるように初演時には、水野でなく水尾となつてゐた。

『続々歌舞伎年代記』によると、この月はこれと「近八」の盛綱、二番目が「怪談木幡小平次」でいずれも好評、前回（宇都宮釣天井、斎藤太郎左衛門など）の不入を挽回して、「前日売切れの大盛況」だったという。

むしろ九代目団十郎の柄、声、せりふを見込んでの黙阿弥の新作だが、改訂作との大きなちがいは序幕が「法問諍」でなく、桜川と黒鷲の遺恨相撲の一件が大きく表面に出ていることである。全四幕。かんたんにその筋をのべる

と――
序幕（藏前八幡社内角力場）旗本奴らのひいきする大関黒鷲が、町奴連中の後援する小結桜川に負け、旗本らに出入りを差しとめられる。これを遺恨におもつた黒鷲は桜川暗討を決心する。（巴屋二階の場）唐犬権兵衛らは桜川

の勝に祝盃をあげ、吉原へくりこもうというが、孝行の桜川は辞退して母の待つ家に帰っていく。

二幕目（今戸橋黒鷺殺しの場）桜川の帰途を今戸橋の袂で待ち伏せた黒鷺は、かえって桜川に斬殺されるが、桜川も黒鷺の弟子に竹槍で股を刺され、立ち廻るうち先刻権兵衛に祝いにもらった煙草入をおとす。黒鷺の助太刀にきた進藤野守之助がこれを拾う。

三幕目（麴町水尾屋敷の場）水尾と進藤は煙草入から黒鷺殺しは権兵衛一味とおもひ、斬り込もうとはやる。主膳がとめるがききいれず、結局煙草入を証拠に訴え出て、町奴を一網打尽にしようとはかる。（桜川切腹の場）橋場の桜川の家では翌日、思いがけなく権兵衛が下主人にされたときいた桜川が、恩義をうけた権兵衛を無実から救うため、申し開きの切腹をする。老母お牧、桜川に恋して押しかけ女房に來た札差伊勢清の娘お花、それに長兵衛も來合せての愁嘆場。

四幕目大詰（花川戸幡隨内の場）（麴町水尾屋敷の場）。この二場は本巻所収の改訂本と全く同じ。ただし改訂本大詰返し「水道端仕返し」の場はなかった。

この初演も『続々年代記』によると、「筋花やかにて而かも締りのある団洲世話物中では庄巻と称す可き佳作なり」と評されているだけあって、すぐれてもおり好評だった。

た。

ことに、右の文の前に「在来のものとは全然異り事実談に拠り……」とある一節にも注目したい。これは活歴でも散切でもなく江戸世話物ではあるが、いかにも明治らしい一種活歴ふうの、史伝本位でしかもすっきりと筋のおつた、近代劇的な作品であることを、示している。

長兵衛をあつかった狂言は、延享元年（一七四四）中村座上演の藤本斗文作「さだめいしやうりやうが碩末広曾我」から、初世桜田治助の「傾城吾孺鑑」（天明八年）、同作「幡隨長兵衛精進まいいた組板」（享和三年）等を経て、集大成的な四世南北の「浮世柄比翼稲妻」（文政六年）までいくつも作られ、その後も類作はすくなくない。しかしそのほとんどは長兵衛単独ではなく、白井権八と遊女小紫との情話がからみ、多くは曾我や不破名古屋の鞘当の世界にとりこまれている。それらに比して、これはまさに「在来のものとは全然異り事実説に拠った、新しい長兵衛狂言なのである。それは前述のように、明治以降の新政府の、なるべく史実に忠実にという趣旨が影響していたとみていいであろう。

もっとも史実そのものは必ずしも一義的ではなく、長兵衛の生死さえ確実ではない。たとえば、長兵衛が水野に殺されたのは事実で、そのとき彼が三十六歳だったというのも定説だが、殺された年は一定しない。この作では慶安三

年で、これは長兵衛の墓所浅草源空寺にある過去帳に「慶安三庚寅年。四月十三日」とあるのによる。しかし公儀の記録たる『柳営日次記』や『嚴有院殿御実記』にはあきらかに「明暦三年七月」とある。その他いろいろの事実から、江戸研究家綿谷雪氏は明暦説を支持しているが、私もそれに従っておく。

また長兵衛らと水野との確執、およびその死因についても一様でない。右の公儀文書では、長兵衛が水野を吉原の遊山に誘ったが、水野は何かの都合でことわった。しかし長兵衛はこれに腹を立て、自分がこわいからだろうとさんざん罵倒したため、水野が怒ってついに殺害に及んだのだ——とされている。

『元正間記』では、慶安三年四月、木挽町の森田座で井筒の呼子玉という二番目狂言があった（これは事実ではないが）とき、水野はその芝居を見て行って町奴とあらそいになり、長兵衛の威勢に負けて遺恨を含み、その場は引いた。が、三日後使いを出し、親交を結びたいからと誘き寄せ、酔いつぶしたあげく寄ってたかって長兵衛を殺したという。またこの殺害方法について、『校合雜記』では、水野が長兵衛に和解を申し入れ、自邸に招いて湯殿に案内し、強力の人たちに長兵衛をおさえさせ、水野が出てきて突き殺した——と記されている。

黒鷲と桜川の遺恨角力、それに桜川の孝心等々も古来講釈や芝居や語り物によく知られた物語である。これらをつきまぜてこの一篇は作られたのだが、眼目となった湯殿の場は、右の『校合雜記』に拠ったものであろう。

初演のさい、黙阿弥ははじめこの湯殿の場にはチョボを入れ、へ打ってかかればひらりと投げ——というような文句を書いてあったが、「団十郎暫時考え」、このチョボは蛇足でやりにくい、いっそ「活動せんにはス（素）でやる方善し」といってチョボを廃し、立廻りも「柔術の本手」をつかったため、この一幕が「一日中の見せ場」となったという（『続々年代記』）。演出家および演技者としての団十郎の見識と実力をうかがうに足る話で、事実、それ以来歴代の長兵衛役者もこの演出で成功しているのである。

また長兵衛が水野に突かれて「ウン……」とうなるところがとくに凄愴だったというが、これにも芸談？がある。明治元年九月二十三日の夜、団十郎がまだ権十郎といつたころ今戸の寮に強盗が入った。養父の七世河原崎權之助は気丈だったので平然と金品を与え、飯でも食って行けといった。が、強盗はその胆力にかえって恐れをなし、やにわに日本刀で斬りつけたため權之助はやがて絶命したが、そのとき団十郎は二階でふるえながら、断末魔の呻き声をきいた。その体験を、後年この芝居に応用したという

のだ。ともかく、そのためにこの大詰は「いかにも真に迫りたり」と記されている。

さて改訂版は明治二十四年（一八九一）六月、歌舞伎座で初演。団十郎四度目の長兵衛で、その他の配役は、市川権十郎（水野十郎左衛門）、八百歳後の市川中車（唐大十右衛門）、坂東秀調（長兵衛女房お時）、市川新蔵（坂田兵庫之介公平）、市川猿蔵（源頼義・出尻清兵衛）、染五郎後の七世松本幸四郎（加茂次郎義綱）など。

「公平法問諍」は、現存では寛文三年（一六六三）刊の上総少掾藤原正信正本の古浄瑠璃が最古とされるが、これは慶安三年より大分後なのでこの点は史実と芝居は合わない。しかしこの「法問諍」はそれ以前にもあったかもしれない。それよりも『続々年代記』にみるように、「慶安の昔しをそのまま市川流の荒事」として団十郎ごのみのはでで古風な劇中劇にえらんだのであるから、いかに明治の活歴めいた作といっても、こうした時代考証にこだわる要はあるまい。むしろフィクションとしておもしろいとおもう。この劇中劇の公平そのほかは大名題でなく、門弟筋ないしごく若手がやるのが本来であろう。なお伊原敏郎の『歌舞伎年表』によれば、この場の加筆には福地桜痴の案も入っていたという。

劇中劇という趣向は奇抜で、花道や客席をそのまま劇中劇のそれに見立てた作劇・演出は、歌舞伎ではあまり類がない。しかもここで武士と町人に確執がおこるという構想には、私はロスタンの名作「シラノ・ド・ベルジュラック」の序幕を連想する。むしろ「シラノ」は一八九七年にパリで初演されたのだから、「湯殿の長兵衛」のほうが古く、したがって何等影響関係はないのだけでも。

長兵衛内の場合は、死ぬのを覚悟で妻子と別れて出かけるという局面が、「佐倉義民伝」や「め組の喧嘩」その他と同巧で、よくある愁嘆。この場ではじめの仕出しのせりふに桜川・黒鷲の一件があったり、権兵衛が疑い晴れて出所してきたりするのは、ここが初演台本のままだからである。

水野邸で入浴をすすめられる段取りも無理がなく、全体に岡本綺堂の新歌舞伎にも似た簡潔で合理的な展開をみることができる。綺堂以後の新史劇、新歌舞伎は、活歴よりむしろこの種の明治期実録物のほうにその源流があるといふべきではなからうか。その点でも、歌舞伎史の過渡期における重要な地位を、この作はもっているとおもうのである。

眼目の湯殿は団十郎の独壇場で、水野を向うにまわしての長ぜりふや柔術の手をつかったの立廻り、手負いの有様

から落ち入るまで、十分の見せどころ。団十郎の後は、その精神と口跡をもっとも濃く受けついだ初代吉右衛門のそれが、群を抜いてよかったのは当然といえよう。

吉右衛門のほかには後の中車の市川八百蔵、七世幸四郎、そして現在では現・幸四郎のものである。

なお余談だが、水野十郎左衛門が切腹したのは実説では寛文四年（一六六四）のことで、長兵衛殺しとは関係なく、無頼のふるまいのため幕命で徳島藩へ転任を申し渡そうとしたところ、髪ふりみだし袴もつけずに現われたので無礼至極とあって切腹仰せつけられたのだという。とにかく

く当時旗本奴が泰平のため血気のやり場がなく、市中を横行し、暴逆をはたらき、町奴とつねに衝突して市民のひんしゆくを買っていたのは事実で、この劇も見方によればそうした世相人心をえがいた一種の世相史劇とみることもできるだろう。

竹を割ったような男の意気をすつきりとえがきあげたこの一篇——それは、真新しい「すまめ 柎目の櫓」の香を誇る、眼目の場のあの浴槽ゆよねの色合いにもたとえられようか。



幕隨長兵衛 九代目市川団十郎

序 幕

村山座木戸前の場

同舞台喧嘩の場

役名 役者の源頼義。同加茂の義綱。同坂田兵庫之助公平。同優容上人。同碓井妹柏の前。同頼義御台所花園。同太刀持。同頼義臣四人。同後見。浪人青山伴蔵。同赤垣文平。町家の女お花。茶屋娘おせん。見物娘大勢。幡随院長兵衛。水野十郎左衛門。唐太権兵衛。渡辺綱九郎。坂田金左衛門。水野中間市介。子分重五郎。同小平。同神田の弥吉。舞台番新吉。火繩売半次。糸屋佐兵衛。木戸番。芝居見物大勢。札売。道具方等。

本舞台一面の平舞台、正面後へ下げて一面に板葺屋根、古風なる芝居掛り、真中に檣、これへ丸く釘抜の紋を染め出せし檣幕、この下木戸、左右に札売の台、軒口へ狂言名題の板、座頭に坂田四郎左衛門、書出しに小舞庄左衛門、二枚目に村山四郎太郎、女形に右近源左衛門、大薩摩には浄雲太夫など連名よろしく、すべて慶安三年禰宜町村山座芝居掛りの体。入口へ大入に付客留と記せしびらを出し、着流しの札売二人、台の上に立ちかゝり、

木戸番二人入口に立ちかゝり、舞台上手には葎簀張りの茶屋、この内に茶屋女一人おり、思い／＼の見物の男女仕出し立ちかゝり、古風なる芝居の鳴物にて幕明く。
場所は何処でも構わぬから、
皆々 見せてくれ。

○ お気の毒でござりますが、爪も立たねえこの大入、

○ とても場所はござりませぬから、

○ どうか明日、早く入らしゃって、

○ 御見物をお願い申します。

○ もと／＼今度の狂言は、坂田四郎左衛門が公平の役廻り、

□ その法問諍ほうもんあそいという新狂言を見に来ましたが、
△ この大入で無駄足をしました。

ト皆々上下へはいる。

○ こんなに繁昌するは悦ばしい事だが、

○ どうかお客を返さずに見せるといいうゝ工夫が、

○ 四人 ありそうなものだなア。

トこの話のうち花道より水野十郎左衛門、渡辺綱九郎、中間市介を連れ出て来り、

綱九 此度の狂言中公平の問答という新狂言が呼物よびものにて、
毎日あふれる程の大入と申す事ゆえ、附け込みおいたれば安心なれども、大した繁昌ではござらぬか。

水野 ついては近藤氏へこの由申し通じ、早速お出である
よう、市介お呼び申してまいれ。

市介 かしこまりました。

ト下手へ入る。

○ これは水野の殿様、毎度御最上様に預かりまして有難
う存じまする。

水野 シテ只今の狂言は。

○ ヘイ丁度公平の問答の明きましたところでござりま
する。

綱九 さようか、しからば場所へ案内してくれ。

○ ヘイ／＼どうぞお入り願いまする。

水野 しからば渡辺氏。

綱九 まず／＼。

ト木戸に案内して水野と渡辺は木戸内へはいる。唄にな
り、花道より幡随の子分 重五郎 同小仏小平の兩人、
町奴のこしらえにて、一本ざし下駄にて出て来る、札売

二人台より下りて、

○ これは花川戸の親分衆、

○ 大分ごゆるり、

○ 四人 ござりました。

重五 いつも大入で、お前達も嘸かしもうかるだろう。

小平 それゆえ客を入れ込み、札も売り切れ、

重五 懐手をして錢もうけだろう。

○ イ、エ買切りのお客ばかりで、

○ 札を売る世話はござりませぬが、

○ 馴染のお客を断わるので、

○ 大きに困っております。

○ 小平 定めてこんな大入じゃア、近い処じゃ見られめえ

が、

重五 唐犬兄貴に用があつて、入れ替わる気で出て来たん

だが。

○ 唐犬親分は東前のお近い処へ入れましたが、

○ 御用なら私がお呼び申してまいりましょう。

重五 それじゃちよつと唐犬兄貴をこゝへ呼んでもらおう

か。

○ ヘイかしこまりました。

トこの時木戸より、唐犬権兵衛町奴のこしらえ一本ざし
にて出て来り、

唐犬 おゝ二人ともよく出て来た。

重五 兄貴を呼びに来ました。

唐犬 長兵衛殿の言いつけで品川まで行く用があれば、大
評判の公平を一日も早く見てえから、今朝の内だけ見て
いたがあまり時刻が遅くなるから、こゝらで切り上げて
見直すつもりだ。

重五　しかし兄貴が一人の処へ、

小平　この二人が割り込んじやア、

重五　ほかの客が困りやアしねえか。

○　イ、エそこはどうかやりくりまして、

○　御見物の出来るように致しましょう。

重五　それじゃア兄貴、ごめんなせえ。

四人　こうお出でなさいまし。

ト四人附き添い、兩人木戸の内へはいる。このうち茶屋娘前へ出て、

茶娘　もうし親方、ともかくも店へいらっしてお仕度をなさいます。

唐犬　イヤ駕籠で行くから仕度はいらねえ、こゝからすぐに出かけよう。

娘　ハイ／＼さようなら辻へ参ってお駕籠を申しつけてまいりましょう。

唐犬　どうかなるたけ急がせて下せえ。

娘　ハイ／＼よろしゅうござります。

ト茶屋娘下手へはいる。このうち芝居の鳴物にて、

唐犬　木戸の手合どもが中へ這入って手間どるのは、二人の場所に困ったと見える。どれ木戸番の替わりをして、こゝで一服やらかそうか。

ト札売の台へ腰をかけ、煙草を呑みいる。この時後ろ

で、わや／＼人声して酒に酔いし侍の客二人、羽織着流し、大小にて町人の娘お花を引き立て出るを、父の佐兵衛追いかける。

佐兵衛　もうし／＼お侍様。コリヤ娘をどうなされます。

伴蔵　どうもこうもあるものか、われ／＼兩人の買切場所へ入れて遣わしたれば、こちらの頼みも聞かねばならぬ。コリヤ当たり前のことじゃ。

文平　諸人の中で酌を致すが恥ずかしいと申すなら、近所の茶屋へ連れてまいって酒の相手をさせねばならぬ。

お花　こうした事になるのなら、たとえ押されて困ってもそちらの場所へははいるまいに、飛んだ事を致しました。

佐兵衛　娘の場代は私が弁えますれば、どうぞそれにてお二人様、御勘弁なされて下さりませ。

伴蔵　ヤア黙ろう。こやつ場代を出せば済むなどと、武士に向かつて無礼なやつめが。

文平　この大入に押されおるを不便なものと助けやりしは、金銀づくにはかえられぬ事だわ。

伴蔵　なんでも茶屋へ同道なし、

文平　酒の相手をさせねばならぬ。

佐兵衛　娘も私同様にお酒は一杯も戴きませぬゆえ、お花　お茶屋へお連れなさる事は、おゆるしなされて下さ

りませ。

伴蔵 ヤア女を連れているやつ故やさしく言えばよいかと心得、

文平 つけ上がる素町人、娘が貸せずば刀にかけても、
二人 かりねばならぬ。

ト兩人佐兵衛を引きすえる。

お花 あれ、誰ぞ留めて下さりませ。

トこれにて唐犬前へ出て、佐兵衛を睨い、立ち廻って侍
兩人を捻じ上げる。

大勢 喧嘩だ／＼。

ト声して、仕出し大勢出て見ている。

二人 ア、痛い／＼。どいつだ／＼。

唐犬 どいつでもねえ。町奴の唐犬権兵衛だ。後ろで始終
を聞いていれば、女を連れた町人をおどして無理な言掛
り、扶持方棒を捻くって、それで女が手に入るのか、百
万石の大名も抵を冠った宿なしも往さ来るさにすれ違
う、いわば天下のお膝元、櫓も歌舞伎御免の場所、木戸
前へ来てごたくをついたら、八百八町の構え内どんなに
吠えつく病犬でも、この唐犬が相手になり噛み伏せるか
ら、

トキツと言って気をかえ、捉えたる手を放し、

イヤこれは思わぬ止め立から、お武家様へ対し過言の失

礼、真平御免下せえまし。どうかこんな子供や町人風情
の年寄りには御不承ながらお二人様、ゆるしてやって下せ
えまし。

ト詫びる事よろしく、伴蔵キツとなる。

伴蔵 うぬ町人の分際で、我々を捻じ上げたな。なお、勘
弁が相ならぬ。

ト刀の柄に手を掛けるを、

文平 ア、これ、その腹立は尤もだが場所が悪い／＼、遊
び処へまいって彼ら如きと出入をしたと言われては、身
分がすたればお構いあるな。

伴蔵 それじゃと申して、

文平 ハテ向うが唐犬、犬の仲間へ入れる気でも、それに
乗らぬが誠の侍、相手にはなりませぬわ。

ト無理に花道へ連れ行くゆえ、

皆々 ヤイ大腰抜けめ、ざまあ見やがれ。

兩人 何だと。

皆々 そりやおこりやアがった／＼。

伴蔵 今にどうするか、

兩人 覚えておれ。

ト思入れあつて兩人向うへはいる。こゝへ木戸番四人出
て、

○ 親分さん、おかげ様で、